

【研究ノート】

原爆と俳句をめぐる一考察

A Study of “Haiku and the Atomic Bombing of Hiroshima and Nagasaki”

永 田 浩 三*

Kouzou NAGATA*

要約

国内外で空前の俳句ブームが起きている。花鳥風月にとどまらず、戦火のパレスチナでもウクライナでも、いのちの尊さやはかなさを俳句で表現する試みが関心を集めている。17音という限定された言葉を用いて、生と死の境界を詠う俳句。かつて、従軍記者でもあった正岡子規によって、俳句に与謝蕪村以来の社会性とリアリズムが持ち込まれると、戦争などのテーマが積極的に扱われ、俳句投稿欄は、新聞・雑誌の購読者拡大に貢献するカラーコンテンツに育っていった。

だが、戦争を詠った前衛俳句は、「京大俳句事件」に象徴されるように、治安維持法による弾圧され、長く沈黙を強いられた。そしてアジア・太平洋戦争の敗戦。桑原武夫は1946年の「第二芸術論」で、俳句には世界に通用する文学性など備わっていないという激烈な批判を展開する。それに反発したのは、かつて「京大俳句」などで弾圧を受けたひとたちだった。自らの表現を奪われたことへのリベンジのテーマのひとつが、原爆を詠むことであった。

1954年3月に第五福竜丸が死の灰を浴びたビキニ事件をきっかけに、ヒロシマとナガサキのふたつの被爆地で、原爆を詠った『句集広島』『句集長崎』が相次いで誕生する。それは、名のある俳人、被爆者、原爆に心を痛める市民たちが総結集する空前の文学運動であった。ホトトギス、自由律、新俳句人連盟など、さまざまな流派結社が参加し、この人類の悲劇に対峙した。本研究ノートでは、できうる限り時代を語る証言者にインタビューを行い、一次資料を収集した。その結果これまで知られなかったエピソードを発掘することができた。

俳句革新の動きは、米軍占領下・本土復帰後の沖縄でも、原発事故を経験した福島でも、盛んにおこなわれている。今や「原爆忌」「ヒロシマ忌」など

*武蔵大学社会学部教授

の季語は定着し、高校・大学生が競う俳句大会でも原爆を扱うことが当たり前となった。そうした中で改めて、原爆というテーマと格闘する俳句が拓く地平とは何かについて、この研究ノートでは私事を交えてエッセイ風に概説することをめざす。この稿は2024年12月に刊行された『原爆と俳句』（大月書店）をもとにして作成された。詳しい論考、主要文献については書籍を参照されたい。

1. はじめに・生と死の境界を詠む世界

筆者がまだ20代で、テレビ番組のディレクター4年目を迎えた頃、衝撃的な番組に出会った。教育テレビの特集『短歌で戦争をうたえるか』。ちょうど、講談社が戦後35年の節目に『昭和万葉集』のシリーズを刊行し、それが高く評価され、菊池寛賞を受賞した時だった。番組は、二人の論客の対論で進められた。哲学者・山田宗睦と劇作家の寺山修司である。山田は短歌は戦争を記録するのにふさわしいメディアだと語る。だが、寺山はそれに異を唱え、俳句こそが戦争を詠むことが可能だと力説した。そこであげた例が、かつて新興俳句の旗手だった山口誓子の句「海に鴨、発砲直前かもしれず」であった。これまで目にしたことがない斬新な句。海原に浮ぶのか、空を飛ぶのかわからないが、のどかな風景が断ち切られ、猟銃の銃口が鴨の瑞々しい生命を狙っている緊張感が漂う。このときの驚きがこころの奥に引っかき傷のように残った。

さて、俳句はわずか17音で構成される世界最短と言われる詩のかたちである。その詩型は、短いがゆえに、生と死の境界を表現する上で鮮やかな切れ味を見せることがある。

巻貝死すあまたの夢を巻きのこし　三橋鷹女

蝶墜ちて大音響の結氷期　富沢赤黄男

てんと虫一兵われの死なざりき　安住敦

死蛭に照らしをかける蛭かな　永田耕衣

例を挙げればきりが無い。生と死の境界に俳句は存在する。死者は向こう側、生者は向う側。その境界があいまいになり、血みどろの世界がこの世に出現したのが、原爆投下後のヒロシマであり、ナガサキであった。そして、多くの被爆者が人生の傷痕を俳句というメディアを用いて表現しようとした。

先ごろ、ノーベル平和賞を日本被団協が受賞した。長らく被団協の活動の最前線に立ち、世界に核兵器の廃絶を訴えてきた先人たちの中に、俳句をものするひとが何人もいる。2020年に91歳で亡くなった被団協元顧問の岩佐幹三は、こんな句を残している。

母唱う経の声背にし逃げ去りぬ 岩佐幹三

あの朝、岩佐さんの広島の実家は崩れ落ちた。母は家の太い梁の下敷きになった。岩佐少年は家の前でたちすくみ、どうすることもできない。劫火が迫る。そこに母が経を読む声が聞こえていた。「母さん、だめだ。火が近づいて来るよ。」「そんなら、早う逃げんさい!」「お母さん、ごめん。僕もアメリカの軍艦に体当たりして、後から行くけえね・・・」。この時の悔恨が俳句になった。岩佐少年は生きる側、母は死にゆく側にあった。先に紹介した永田耕衣の「死蛍に照らしをかける蛍かな」は、すでに死んでいる命に対して、それを知ってか知らずか、懸命に光を当てて、徒労かもしれないにもかかわらず復活を祈る句である。耕衣は原爆を詠ってはいない。だが、筆者にはこれもまた原爆俳句のように思えてならない。

2. 原爆俳句までの軌跡

俳句がいまの形になるにあたってその礎を確立したのは正岡子規であった。正岡子規は、陸羯南の新聞『日本』の記者として記事を書くだけでなく、俳句欄を設け、そこに読者からの投稿を掲載することで、メディアの中で

の俳句の地位を高めることに成功した。子規が手本としたのは、松尾芭蕉だけでなく、それまで光が当たることが少なかった与謝蕪村である。蕪村は、花鳥諷詠のみならず、社会性の強い句を多く残している。

さみだれや大河を前に家二軒　　与謝蕪村

五月雨によって川の水が増している。そのかたわらにあって荒れ狂う川に押し流されそうな家が寄り添うように建っている。この句は単に風景を詠みただけでなない。中村稔によれば、句の背景にはひとり娘の「くのを」が婚家を去り、ひとりで懸命に生きようとするさまを暗示する句であると。のどかさだけではない、リアリストで社会派の蕪村を子規は強く意識していた。

子規は日露戦争に従軍し、記事を書くことに意欲を燃やす。だが病気がそれを許さず、若くして子規はこの世を去った。俳人子規は、世相に向きあうジャーナリストでもあろうとした。

子規のあと、俳句はどう展開したのか。弟子の高浜虚子と河東碧梧桐。このふたりが今日に至る俳句の多様化の揺り籠となった。虚子は花鳥諷詠を唱え、大衆化に寄与する。碧梧桐は新しいテーマに挑戦し、新しい言葉遣いを編み出し、自由律という俳句の地平を切り拓いた。自由律は、やがて長崎の原爆俳句の作者・松尾あつゆきに引き継がれることになる。

さて、子規が俳句の世界に求めようとした社会性は、1930年代、戦争の時代にさまざまなかたちを形成しながら新たな俳句を生み出すことになる。1937年の盧溝橋事件をきっかけに日中戦争は本格化する。季語を持たない俳句の旗手であった山口誓子は言った。「もし新興無季俳句が、こんどの戦争を取り上げなかったら、それはついに神から見放されるときだ・・・」。戦場では多くの俳句が生まれ、内地では戦場を想像して「戦火想望俳句」が生まれた。

夏灼くる砲車とともにわれこそ征け　長谷川素逝
落日に支那のランプのホヤを拭く　富沢赤黄男

素逝、赤黄男らは、戦場で完成度の高い俳句をつくった。新たな俳句を生み出す機運は高まるなか、中でも「京大俳句」は俳句の実験場となり、女性の表現者にもその場は解放された。

英霊しづと帰る大地に閨の聲　橋本雅子
戦死せり三十二枚の歯をそろへ　藤本清子

戦争の熱狂。それとは逆の虚無と悲しみ、秘めたる怒り。それを俳句に呼んだのが「京大俳句」の会員のひとり、渡邊白泉である。

繃帯を巻かれ巨大な兵となる　渡邊白泉
憲兵の前で滑って転んちやつた
戦争が廊下の奥に立ってゐた

渡邊白泉が特高を批判したのと同じように、他の京大俳句の会員もこうした俳句を発表する。

憲兵の怒気らんらんと廊は夏　新木瑞夫
特高が擾（みだ）す幸福な母子の朝　中村三山

ついに俳句に弾圧の手が及んだ。小林多喜二の死から7年後、1940年2月、「京大俳句」の主要会員が、治安維持法違反で検挙された。特高の取り調べの様子は、後に会員たちの手記から明らかになっている。会員のひとり、仁智栄坊（にちえいぼう、俳号にロシア語で問題なしの意を込める）は特高による取り調べのようすを後にこう書いている。

「(え、革命精神もやしたんやろが)と脅し煽った黒いマフラーのあのボスのいうように、ぼくは、革命精神に燃え立ち、十七字の短詩を創っただろうか?・・・(中略)・・・戦闘機ばらのある野に逆立ちぬ。」(『俳句研究』1979年1月号)

仁智栄坊は、懲役2年、執行猶予3年の有罪を言い渡され釈放された。出所後は満州に渡り、その後シベリアに5年間抑留された。帰国後はソ連に洗脳されたとの嫌疑を占領軍からかけられ、就職はままならなかった。栄坊が逮捕される二年前につくった軍批判の句がある。

シャンパンとオムレツに大佐の嘔吐　　仁智栄坊
児を残し男はいくさに逃げてった

こうした弾圧に、どのような人間の暗躍があったのか。近年少しずつその姿が現れつつある。1940年大政翼賛会が生まれた時、日本俳句作家協会が組織された。2年後、日本文学報国会ができると、俳句作家協会は俳句部会に改組・統合された。部会長の高浜虚子の下に小野燕子(ぶし)(本名・小野賢一郎)が就任したが、この小野燕子こそが、弾圧の黒幕だったことがわかってきている。小野燕子が主催する結社「鶏頭陣」の同人だった俳人の永田耕衣に、筆者は1990年代に面会し、当時の状況を聞いた。小野燕子は戦争中は日本放送協会の文芸部長、特高に太いパイプを築き、耕衣を脅し、中村草田男を脅した。『京大俳句』の弾圧事件の裏にも小野燕子がいたと言われるが、調査はまだ始まったばかりである。いずれにしても、治安維持法は俳句の世界にも猛威を振るい、表現者たちは沈黙を強いられることになった。

3. 第二芸術論の衝撃

今泉恂之介は『俳句史の真実』の中で、こんなことを書いている。「芭蕉の頃から現代までの三百数十年。この間、俳句の世界を最も大きく揺り動かしたのは、第二芸術論騒動ではないだろうか」と。今泉がここまで強調する「第二芸術論」とは何か。「第二芸術論」という論文が掲載されたのは、岩波書店の『世界』1946年11月号。8ページにわたるエッセー風の論考であった。書いたのは、当時東北大学法文学部助教授の桑原武夫である。桑原は、有名俳人の句と、さほど有名ではないひとの俳句の中から、よいと思う作品を選んでもらうという調査を試みた。結果は、虚子であっても富安風生の句であっても違いがわからないというものであった。つまり権威者の俳句だからありがたいのであって、作者がわからなければ価値がない。そんなものは一流の芸術とは言えないと断じたのだ。桑原は攻撃の手をゆるめない。西洋の芸術は大地に根を張り、理想の花を空高く咲かそうとするのに対し、俳句は野の草のようなもの。一流の芸術とはほど遠く、せいぜい第二芸術ではないのかと批判した。桑原はとどめを刺す。「学校教育から俳諧・俳句的なものをしめだしてもらいたい」と言ったのだ。別の場合では、こんなことも言っている。俳句では原爆などというものを表現することは難しいと。1981年、筆者は「第二芸術論」について、桑原武夫本人にその評価を問うたことがある。すると、意外にも桑原は、「あれは若気の至りだった」と言って頭を掻いた。俳句では、原爆という人類の悲劇を表現することはできないと言った桑原。これに対して、戦後の俳人たちは敢然と奮起することになる。

4. ヒロシマを詠む

原爆をテーマにもっともはやく俳句をつくったひとはだれだろうか。答

えは簡単ではない。発表するということ言えば、はじめは日本軍の統制下にあって被害のすさまじさを口にすることはできず、1945年9月以降は、占領下のプレスコード(検閲)に置かれ、1952年まで自由に発表する機会が失われたからだ。それでも、多くの被爆者たち、そして俳句を表現の器としたひとたちにとって、自身のノートや手帳に人知れず原爆俳句は書き留められていった。

その代表は、小説『夏の花』の作者である原民喜である。私事になるが、原の実家は広島市幟町。筆者の母の実家のすぐ近くである。爆心から800メートル。母は当時、幟町小学校の栄養教諭。小学生や兵舎で過ごす兵士たちのまかないをやっていた。あの朝は遅番で、自宅にとどまり、妹の水着を縫うためミシンを踏んでいた。爆風によって家はべしゃんこになったが、ミシンが体を守ってくれたため、命を拾った。劫火の中、大名の浅野家の縮景園の庭園を通り抜けて、京橋川のデルタで一夜を明かした。この避難路は原民喜と全く同じである。母の目の前、あるいは後ろに原の姿があったのかもしれない。原民喜はメモ代わりに23の句を手帳に書きつけた。そのいくつかを紹介する。

夏の野の幻の破片きらめけり 原民喜
 短夜(みじかよ)を倒れし山河叫び合ふ
 日の暑さ死臭に満てる百日紅(さるすべり)
 山近く空はり裂けず山近く

原は「空はり裂けず」と詠んだが、実際は天地が張り裂けるような体験をしたのではなかったか。もうひとり、初期の俳句を紹介する。広島の代表的な俳句結社「夕風」の同人、西田紅外の句である。

熱風に卷かれ肉(しし)の檻樓(らんる)のひらひらす 西田紅外
 屍(しかばね)に躓(つまづ)き人のことどころでなし

「帰りました」と丸焼け人間これが母

西田の見た惨状。西田はこれを 1980 年に発表した『屍畳』の中に載せた。こうした生々しい俳句をつくった俳句をつくったひとは決して少なくないように思う。俳句を再開するには、紙と筆記用具があれば足りた。瓦礫のなかで、楽しみに餓えていたひとにとって、俳句は格好の娯楽となった。だが、こと原爆をテーマにした俳句が世に出るには時間が必要だったのだ。

原爆に対し、そして核兵器に対して日本の表現者たちが本気で向き合うようになったのは、1954 年 3 月、太平洋マーシャル諸島ビキニ環礁でアメリカ軍による水爆実験が行われた際、マグロはえ縄漁船・第五福竜丸が死の灰を浴びた「ビキニ事件」からである。この事件をきっかけに、原水爆反対の声が高まり、署名は実に 3200 万筆を超えた。いち早く反応したのは、詩人たちであった。ここで生まれたのが「死の灰詩集」である。事件から 2 か月後に企画され、10 月に刊行されるというスピードであった。その中に詩を寄せたひとり、済州島 4・3 事件にも関与した詩人の金時鐘は、2024 年現在 95 歳。金は「南の島 知られざる死に」という詩を発表する。そこにはマーシャル島民たちの被曝がうたわれていた。

さて、ビキニ事件を契機に俳人も動き出す。『句集広島』は 1955 年 8 月 6 日に発行された。19 人が編集委員に名を連ねた。俳句界の重鎮の多くは教育関係者や医師で、広島市の中心部に住んでいたため、原爆の犠牲となった。郊外にいて助かったひとたちは、結社や俳句のスタイルの壁を超えて連帯し、中央の俳句雑誌にも協力を呼び掛け、公募を行った。応募総数 11000 余句。応募者は 674 人。うち 250 人が被爆者であった。

当時の事情を知る「夕風」の前主宰、飯野幸雄によれば、選考を手伝った俳人は後に「口語俳句」で活躍する岡崎水都であった。水都は、ガリ版刷の名人であった。実は、原爆俳句を語る上で、忘れてはならないのは、それぞれの地域で地道に印刷をなりわいとしてきた人たちの献身的な作業

である。彼等彼女らの手による、半世紀以上にわたる息長く、丁寧かつ正確な印刷作業なしには原爆俳句を語ることはできない。俳句を共有し、継承し、原爆体験を文化として高めていくために印刷というメディアがたいへん大きな力となったことをここに記しておきたい。

『句集広島』に掲載された 1521 句の中で、もっとも歳が若い作者は、10 歳の行徳功子である。

蝉鳴くな正信ちゃんを思い出す 行徳功子

この句を投稿したのは、母の行徳すみ子である。行徳さん一家は、広島市小網町で原爆に遭遇。夫・正吉、息子の正道、正信、娘の功子、弘子を失った。ただひとり生き残ったすみ子は、故郷の熊本に帰り、娘の功子が遺した句と自身の句を投稿したのだった。2023 年、ソプラノ歌手の小暮沙優は、『句集広島』を歌うコンサートを広島や東京で開き、そこで行徳功子の句を朗々と歌い、人々の涙を誘った。筆者は功子ちゃんと正信ちゃんが、この世によみがえったような感覚に襲われた。会場には被爆者の方も招かれていた。2024 年 95 歳になる伊達えみ子である。

蝉の穴のぞけば被爆の 16 歳 伊達えみ子

ひろしまの蝉の木夜は少年棲み

ヒロシマの椅子が足りない蝉しぐれ

原爆を詠った俳句にもっとも多く登場する生き物、それは蝉である。原爆が投下されたあと、廃墟の中で、鳴き声やうめき声はやがて静かになり、音が失われた。そんな中で、聴こえてきたのは、つんざくような蝉の鳴き声である。蝉は原爆がこの世にもたらされたとき、まだ穴の中にいた。なにも知らないで這い出て、樹木をよじ登り、羽化し、羽根が透明から色が

つくようになり、やがて大音声の鳴き声を上げ始めた。原爆の記憶、それは蟬の鳴き声、そして蟬が這い出てきた穴であった。ちなみに、『原爆と俳句』（永田浩三）の表紙は、鉛筆画家の木下晋に本のために新作を依頼した蟬の絵を用いている。ほかの選択肢はないと思い詰めるほど、筆者は木下の絵が好きだった。

句集『広島』には、かつて「京大俳句」に参加し活躍していた俳人たちも多く句を寄せている。そのいくつかを紹介したい。その筆頭は治安維持法違反の容疑で検挙され活動停止を命ぜられた西東三鬼である。

広島や卵食ふ時口ひらく　西東三鬼
 鳥雲に死者の歌声かもしれず　鈴木六林男
 原爆都市の寒暮英語の唄がほろん　河内俊成
 平和祭交める犬を打擲す　仁科海之介
 広島や死の影見よとマッチ擦る

さて、『句集広島』には、満州俳壇で活躍し、戦後は広島の俳誌「夕風」で活躍した荻米砂吐子も参加している。アバンギャルドな作風で知られる砂吐子の連作は異彩を放つ。俳句では原爆を詠むことはできないとした「第二芸術論」にリベンジを果たそうとした。こうした特異な俳句が選ばれるのあたっては、新興俳句の旗手野田誠が編集委員だったことが大きいとされる。それほど、「句集広島」には自由の気風が流れていた。

ノー・モア・ヒロシマズ　こつこつと石を刻むは『墓』　荻米砂吐子
 ノー・モア・ヒロシマズ　ぶよぶよと膿（う）んで腐るは『神』
 ノー・モア・ヒロシマズ　る・る・る・る・と明日を指すは『鳩』

『句集広島』以降も、広島のとたちは、今日に至るまで、原爆俳句の火を絶やさずに伝えようとしてきた。2024年100歳で亡くなった木村里

風子は、長く「楓」の主宰を務め高齢者施設で暮らす被爆者への俳句の指導にあたってきた。里風子は、福岡県・博多で終戦を迎え、8月16日に広島に入り、宇品港の暁部隊に合流し遺体処理にあたった。長く入市被爆者は8月15日までの広島市内に入ったひとという制限が設けられ、被爆者健康手帳取得の対象にならなかったが、近年20日まで枠が広げられたため、医療保障を受けられることになった。

木村里風子の句「原爆忌 万の市民の短い翳（かげ）」は、広島市の三滝寺の境内の中に作られた原爆句碑の中央に刻まれている。三つの滝があるから三滝寺。弘法大師ゆかりの真言宗の古刹の句碑を見るため、急な階段を登っていたとき、突然筆者はえも言われぬ思いに襲われた。この寺には昔来たことがある。寺の頂上には京都清水寺にあるような舞台が設けられていた。それを見て思い出したのだ。小学生の時、母の一族が命をつなぐにあたってお世話になった方たちへのお礼の旅に同行したことがある。母と祖父、涙、また涙の再会。京橋川のデルタで一夜を明かした母たちは、三滝寺の滝で水をもらい、しばらく滞在した。その後、みかんで有名な瀬戸内海の能美島に移り、急性放射能症から回復することができた。広島原爆俳句をたどる旅は、わが家族の生存の軌跡をつきとめる旅でもあった。

5. ナガサキを詠む

2020年3月、コロナ禍のただ中、筆者は五島列島福江島富江に向った。この町の薬局の山本奈良夫の妻は、長崎原爆俳句大会を支えた俳人・隈治人の娘である。隈治人には、『原爆百句』という句集がある。隈自身は3年にわたりシベリア抑留を経て、1948年帰郷。そこで故郷の惨状を知り、一生かけて原爆に向き合うことを決めた。この人生は、かつて筆者がその人生を辿った広島の詩画人・四國五郎の人生と重なる。（『ヒロシマを伝える・四國五郎と原爆の表現者たち』）。ここで隈治人の句を紹介する。

原爆忌腕鈴なりの電車過ぐ 隈治人

雲が首灼く浦上花をもっと蒔こう

長崎の盆や灯らぬ墓地多し

山本奈良夫は、妻の父である隈治人が全身全霊で俳句に打ち込む姿をみて、俳句のすごみを知った。大家・金子兜太が開く句会でのことを奈良夫は筆者に語った。兜太が自身の代表的な句「弯曲し火傷し爆心地のマラソン」を紹介したときのことである。兜太は、「火傷し」を「やけどし」と読み上げた。そこで奈良夫が手を挙げた。先生、「火傷し」は「やけどし」ではなくて、「かしょうし」の方がよくないですか。兜太は口のなかで何度も、「かしょうし」「かしょうし」ところがした。うん、たしかにそうかもしれない。以来、この句は「かしょうし」というようになった。俳句は時として作者を離れ、鑑賞する側からの批評を受入れ、変化していくことがある。「弯曲し」の句はその典型だと思う。

ところで、1955年に長崎原爆忌俳句大会が開催され、『句集長崎』が誕生したのは、ひとりの青年の呼びかけによるものだった。呼びかけたのは柳原天風子（本名・柳原一由）。当時28歳だった。天風子は有明海を挟んで島原半島を臨む熊本県荒尾市に生まれた。戦争中は北九州市の八幡製鉄所に勤務。戦後、長崎市の長与に住むようになったとき、その惨状を目の当たりにした。そして、「俳句をひっさげて、平和来れと叫び続けなければならない」と地元新聞に投稿した。これが原爆忌俳句大会のきっかけとなった。天風子の代表的な原爆俳句がある。

蟬籠に蟬の眼のあり原爆忌 柳原天風子

籠のなかでどこを見ているのかわからないつぶらな蟬の眼。蟬には自分の姿は認識されているのだろうか。長い間地中で暮らし、この地上に出て

きてもわずかな命しかない蟬。そのわずかな時間にこの世で蟬がなすべきことは何なのか。天風子が暮らしたのはＪＲ長与駅前。長与駅からは原爆の被災者を救出するための汽車が出発した駅として知られる。

天風子が俳句大会を通じて伝えたかった俳句。それは、松尾あつゆきが残した俳句の数々であった。松尾は原爆投下直後から句作を続けたが、検閲によって長く発表の機会を奪われていた。自由律俳句の荻原井泉水の結社「層雲」に参加し、井泉水から直接教えを受けたこともある松尾あつゆきは、幻の句集『火を継ぐ』のなかで、原爆投下直後の地獄の日々を句に残した。

わらふことをおぼえちぶさいまはもほゝえみ　松尾あつゆき
すべなし地に置けば子にむらがる蠅
とんぼうとまらせて　三つのなきがらきょうだい
ふところにしてトマトひとつはヒロちゃんへこときれる
なにもかもなくした手に四枚の爆死証明

松尾あつゆきは、妻・千代子、長女・みち子、長男・海人、次男・宏人、次女・由紀子を失った。2024年12月、日本被団協代表理事の田中熙巳はオスロでノーベル平和賞受賞の演説を行ったが、長男・海人とは長崎中学の同級生で仲良しであった。

松尾あつゆきの俳句を世に出し、長崎の原爆についてみんなで考える場をつくりたい。柳原天風子のこの願いに賛同し、支えたのは上述の隈治人であり、大分の田原千暉（ちあき）と妻の田原夏子たちであった。

田原千暉は19歳の時、急性骨髄炎に倒れ、一夜にして歩行が困難になった。広島や長崎に旅することはかなわず、原爆については、丸木位里・俊の「原爆の図」の展覧会と、土門拳のヒロシマの写真集によって、その認識を深めていった。印刷所を営みながら地元で平和活動を続け、その活動

の頂点に長崎原爆忌俳句大会があった。

2024年4月、筆者は三か月後に100歳を迎える田原夏子に会うことができた。夫は14年前87歳で亡くなっていた。田原夏子が好きな自作の句をあげてもらった。

額（ぬか）吹かれ眠る子丸し原爆忌 田原夏子
爆笑が納得炎天来し母ら

田原夏子は夫とともに印刷所を経営しながら、化粧品の販売の仕事をし、家計を支えた。近くの幼稚園の卒園式。ひとりひとり記念のお皿をつくって配するという仕事が定着し、一家は一息ついた。女性の社会運動は楽しくないと続かない。「みんながそうじゃ、そうじゃと納得し、爆笑するような集会、子どもを負ぶって出かけて行く甲斐のある集会でないとね」と田原は笑った。

6. 東京から原水爆を詠む

東京の原水禁運動は、ビキニ事件とベトナム戦争反対運動と切っても切れない。そのなかで、詩人であり俳人であった、林逸平の名前を忘れてはならない。逸平の故郷は朝鮮民主主義人民共和国。ちなみに、広島や長崎では、日本人だけでなく、米国生まれの日系人やドイツ人、東南アジアからの留学生、植民地だった朝鮮半島や台湾、さらに中国大陆からのひとびと、米兵の捕虜などが被爆した。朝鮮戦争で核兵器が使われる危険性が叫ばれたとき、被団協の前身である原爆被害者の会を立ち上げた川手健や山代巴らとともに集会で核兵器反対の声をあげたのは、チマチョゴリ身を包んだ朝鮮人の女性であった。広島女学院講堂で1949年に開催された集会では会場の半分は朝鮮出身のひとたちで占められた。被爆者運動が偏狭なナショナリズムにとらわれているという批判があるが、初期の運動を見る

限り、そんなことはなかった。運動の幅が狭まっていくのは今世紀に入ってからではないかと、筆者は実感している。

さて、林逸平の遺族は手を尽くしたが見つけることはできなかった。逸平の編集したものとして『原爆句集』(原爆忌東京大会)や、『多摩無名労働者詩集』がある。この流れを引き継ぎ、1960年代、ごみの捨て場所だった夢の島に放置されていた第五福竜丸の保存に立ち上がり、それを契機に今日まで久保山忌俳句大会を続けてきたのが、石川貞夫、田中千恵子、飯田史朗らの新俳句人連盟の俳人たちである。新俳句人連盟そのものは、戦後すぐ、機関紙「俳句人」を発行し、西東三鬼、富沢赤黄男、高屋窓秋、橋本多佳子らきら星のような俳人が参加したこともあったが、その後、分裂を経て今日のかたちになった。

第1回の久保山忌俳句大会は、1981年に開催され、田中千恵子が第一席に選ばれ、福竜丸の船員証が贈られた。そのときの句がこれである。

焼津まで秋空一枚遺言碑 田中千恵子

遺言碑とは「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」と言い遺して亡くなった第五福竜丸の元無線長・久保山愛吉の最後の言葉を刻んだ石碑のことである。夢の島からかつての福竜丸の母港である焼津まで一面の青空を突っ切って願いがつながっていく。2022年、筆者は久保山忌俳句大会に取材を兼ねて参加し、句を詠んだ。遺言碑の横には赤い柘榴(ざくろ)の実がたわわに実っていた。ちょうど、ロシアのプーチン大統領がウクライナに侵攻し、原子力発電所への攻撃を行っただけでなく、核弾頭による威嚇を始めていた。筆者は長年親しくしていただいていた元第五福竜丸乗組員の大石又七なら、きっとこの事態に怒っているだろうと想像した。そのなかで一句が生まれた。

柘榴たわわ漁夫又七の憤怒込め 永田浩三

ビキニ事件さえなければ、焼津ですっと漁師を続けたかった大石又七さん。ずいぶん取材でお世話になった。赤い柘榴に黒い斑点。それは海で焼けた大石さんのしみのように思えた。句会の結果は第一位。船員証をいただくことになった。船員証にはこんな一文がある。

あなたは第五福竜丸の特別の船員として、久保山愛吉さんの遺志を引き継ぐ平和と愛の守り手として、地球上から核兵器をなくし、宇宙の中でひととき美しく輝く地球の自然を守り、世界の人々の平和で豊かな暮らしのためにベストを尽くし、今後もすぐれた俳句を生み出してください。第五福竜丸平和協会。

まるで、宮澤賢治の「グスコーブドリの伝記」の主人公のような、ウルトラマンになったような面はゆい気持ちしがした。

7. 沖縄・福島 そして世界に向けて

沖縄本島北谷町に、筆者が尊敬する俳人がいる。野ざらし延男である。近著『俳句の地平を拓く』で数々の賞を受けた。延男は、季語を疑い、旧態依然たる俳句の世界に挑戦状つきつける人生を歩んできた。延男は、俳句には蟬の特性と重なるものがあると言う。

土中の胎へ響（とよ）む末期の蟬時雨 野ざらし延男
蟬時雨血がひいていく草の束

生と死、いのちのはかなさ、いのちの尊さ、蟬の持っている特性を俳句もまた備えている。そんな切ない特性を持っているにもかかわらず、今を切に詠まなくてどうする。それが俳壇への厳しい批判につながった。

縄跳びの輪の中基地の子らただれる　野ざらし延男
爆忌の飯ぼろぼろ箸からこぼれる影
水洩出そうな街音なく原潜きて
一条の涙線となりオートバイ

最後のオートバイの句は、本土復帰を果たしたにもかかわらず、日本国憲法が精神が行き渡らず、核兵器はそのまま置かれ、基地被害を繰り返す沖縄の現実抗議するため、オートバイで国会議事堂の正門の鉄の門扉に激突して死んだコザ出身の青年・上原康隆を詠んだ。筆者は4年前、上原の双子の兄・康房を喜瀬武原の自宅に訪ねたことがある。弟がかぶっていた黒いヘルメットには激突のすさまじさを物語る跡が残っていた。野ざらし延男は、長く長崎原爆忌俳句大会の選考委員を務めた。延男が選んだ句をひとつ紹介する。

闇を抱く火箭（かがり）くる日を啼（な）くせせらぎ

正林鶴城 愛知県

さて、2011年3月の福島第一原発事故から14年が経とうとしている。幾度となく放射性物質が降り注いだ地域の人々の多くは、故郷を追われ、家族と離れ離れとなり、仕事を失い、健康や命を失い、牛や馬、鶏を失い、農作物や山菜の収穫の喜びを味わうことも禁じられ生きてきた。そのつらさはいまでも大きく変わっていない。そんななか、ひとりの高校教員が高校生とともに俳句の可能性を追い求めてきた。中村晋。金子兜太が主宰した「海程」の同人である。2020年3月、筆者は中村を訪ねた。福島の高校生たちに、自分たちの暮らしを俳句という器を用いて表現してもらいたい。手掛かりにしたのは、栗原貞子の詩「ヒロシマというとき」だった。

〈ヒロシマ〉というとき

〈ああヒロシマ〉とやさしく答えてくれるだろうか 〈以下略〉

この詩のポイントは、被爆の被害を他国のひとと語り合い共有するためには、まず戦争を引き起こした日本の加害性を自覚するということから始めなければならない。その延長上に福島も被曝もあることに、中村は気づいてほしいと願った。そこで生まれた高校生の俳句がある。

空っぽのプールに雑草フクシマは 菅野水貴

被曝者として黙禱す原爆忌 高橋洋平

他人事ではない。自分たちもまたヒバクシャなのだという自覚、そしてその隊列に連なることへの複雑な思い。原爆の日の式典を見ながら高校生は一緒に死者を悼み、平和を祈った。そして彼らを指導する中村晋自身の句もまた陰影を帯びていった。

麦秋や空が彼女の遺書でした 中村晋

ナガサキよ首なき像を噛む蜻蛉（とんぼ）

春の牛空気を食べて被曝した

ひとりひとりフクシマを負い卒業す

思えばこの8年、原爆を詠んだ句をひたすら集め、ノートを作った。ノートの山に踏み迷い、ノートのノートを作った。わかってきたことがある。原爆俳句はなにも原爆を詠んでいるとは限らない。初期の広島句集には、風のそよぎや花が咲いたこと、空が青いことを素直に喜ぶものが多い。そうなのだ。あの地獄を体験した中で、ようやく普通の自然の営みにこころが動き、言葉にしようというエネルギーがよみがえっている。ああ、命って素晴らしい。その反面、失われた命、死の記憶は消えることなく生々し

くよみがえり、ひとびとをのたうち回るような苦しみに追い込むのだった。その苦しみは沖縄や福島の人びとに不幸にも受け継がれている。

俳句はわずか17音。小さなろうそくのようなものだ。死者を悼み、怒りや悲しみを忘れない、悲劇を繰り返さないことを世界に向けて発信する灯である。灯は時間と共に消えるが、言葉は消えない。一年の一回、原爆忌に俳句を詠んでみる。うまい、下手は関係がない。こころを集中させる。離れたひとであつても思いを共有し、同じ時間を、同じ時代を呼吸する。俳句ってほんとうにすごいものだ。そんな当たり前のことがこの研究ノート of 結論である。

今回の『原爆と俳句』(大月書店 2024年)の表紙には、鉛筆画家・木下晋が特別に描いた蟬の絵が使われている。原爆俳句のなかで、もっとも多く登場する生き物は蟬である。原爆投下直後、うめき声と鳴き声があふれる中で聴こえてきたのは、蟬の声であった。地下にあつて原爆を知らずに地上に現れ、そこで鳴き声を立て始めた蟬もいる。被爆者にとって、いかに蟬の記憶が今も鮮明なものであったか。ぜひ本の実物を手にとっていただきたい。

【主な参考図書・文献(引用順)】

- 寺山修司『寺山修司の俳句入門』光文社文庫 2006年
嶋岡晨『イメージ比喩』飯塚書店 1996年
嶋岡晨『詩のある俳句』飯塚書店 1992年
塚本邦雄『百句燦爛』講談社文芸文庫 2008年
塚本邦雄 寺山修司『火と水の対話』新書館 1977年
岩佐幹三 被団協新聞と岩佐幹三さんへの永田浩三インタビュー 2017年
永田耕衣『永田耕衣俳句集成 而今』沖積舎 1985年
正岡子規『俳人蕪村』講談社文芸文庫 1999年
長谷川宏『日本精神史 近代編 上下』講談社選書メチエ 2023年
中村稔『与謝蕪村考』青土社 2023年

- 山口誓子『誓子俳話』東京美術 1972 年
- 宇多喜代子『ひとたびの手紙から』角川ソフィア文庫 2006 年
- 『富澤赤黄男 高屋窓秋 渡邊白泉集 現代俳句の世界 16』朝日文庫 1985 年
- 川名大『渡邊白泉の 100 句を読む』飯塚書店 2021 年
- 『京大俳句を読む会会報』第 1 号～第 4 号 2010 年～2017 年
- 田島和生『新興俳句の群像 京大俳句の光と影』思文閣出版 2005 年
- 大河喜栄『蠟座の軌跡』蠟座現代俳句研究会 1989 年
- 小野賢一郎『戦争と梅干し』賓雲舎 1941 年
- 今泉恂之介『俳句史の真実』NPO 法人双牛舎 2017 年
- 桑原武夫『第二芸術』桑原武夫全集第 3 巻 朝日新聞社 1968 年
- まつもと・かずや『戦後世相史と口語俳句』本阿弥書店 1992 年
- 『原民喜全集 普及版』全 3 巻 芳賀書店 1966 年
- 『原民喜全集』全 2 巻 芳賀書店 1965 年
- 『日本の原爆文学⑬ 詩歌』ほるぷ出版 1983 年
- 句集広島刊行会『句集 広島』近藤書店 1955 年
- 現代詩人会『死の灰詩集』宝文館 1954 年
- 小暮沙優『原爆句集広島を歌う』アクションつなぐ（島田牙城）2023 年
- 鈴木厚子『ひろしまの祈り』『雉』三篠句会 2014 年
- 柳原一由（天風子）編集『句集 長崎』平和教育研究集会事務局 1955 年
- 隈治人『原爆百句』土曜俳句会 1988 年
- 金子兜太編『現代俳句を読む』飯塚書店 1985 年
- 金子兜太『戦後俳句史』岩波新書 1985 年
- 松尾敦之『火を継ぐ』俳句地帯叢書第一集 平戸文化協会 1946 年
- 松尾あつゆき『原爆句抄』文化評論出版 1975 年
- 田原千暉『田原千暉句集 車椅子』現代書坊 1956 年
- 田原夏子『田原夏子句集 麦秋』二条印刷 2003 年
- 『新俳句人連盟機関紙 俳句人の 60 年』新俳句人連盟 2007 年
- 『原爆句集』原爆忌東京俳句大会実行委員会 1981 年
- 多摩無名労働者詩集刊行会・尾崎正道編『多摩無名労働者詩集 1974』揺籃社 1974 年
- 『未来へ 第五福竜丸とともに』久保山忌句会実行委員会 2021 年
- 野ざらし延男『俳句の地平を拓く』コールサック社 2023 年
- 中村晋 大森直樹『福島から問う 教育と命』岩波ブックレット 879 2013 年
- 中村晋『第一句集 むずかしい平凡』BONEKO BOOKS 2019 年